

幼児教育を考える

千羽喜代子

一、はじめに

岡政が倉橋惣三の主張とする「幼児の自然の生活形態のまま」で保育を行なうことが現実に可能なことを実証しようとし、「すべての形式的束縛を幼稚園から取り去る」ことなど四つの用途を提案してから、約五十五年の歳月が流れている。

当時の倉橋理論の進歩性に対する保育界の受け止め方は、まさに現在の informal education の受け止め方に共通性を見出すことができる。歴史は循環しているという感が深い。

すなわち、一つの保育室が一つの城であり、一人の保育者が城の主である現在の幼稚園に、幼児の生活に保育の目的を近づけて

いく、子どもの生活を中心において保育を考えていく方向づけをすることは、現代流の用語をあてはめるならば、informal education（現在の制度化された学校があるのに対して、インフォーマルな教育の役割を見失わないということから、それを教育の重要な観点としている）とも言えると思うが、五十五年を経過した現在においても、なかなかその実現は容易ではない。

それは、大局的には現在の教育界あるいは保育界の主流となる教育理念あるいは保育理念に依っていると考えられるが、保育実践の場においては、次のことからも考えられる。

● Open mind を養う

「開かれた心」とでも訳せばよいであろうか。私をも含めて、一つの固定概念が出来上ってしまっているときには、物事の解釈や見方がその範囲を出ないことがある。同様に、すでに十年以上にわたって保育実践の実績を持っている保育者の保育理念を変えることは容易ではない。

自分自身の中に、自己変革の要求がある場合は、自分から求めていくという積極的な態度が生じ、変革のための努力をする。しかし、自分の中には、さして要求がない場合には、与えられるものに対して、すべて受け身であり、しかも、批判的であるばかり

でなく、自分の保育を肯定的に考えようとする材料にすり変えてしまいがち。

開かれた心は、とらわれない心から出発している。しかし日本人は、とらわれない心を保持することが難しい社会環境の中に置かれているといわれている。

開かれた心の原型は、何時の頃に形成され、そしてまた、その心は、何時の頃からとらわれた心として閉ざされていくのであるうか。

● 親が期待する保育

もう一つの問題点は、親が幼稚園に期待しているところの保育内容及び指導である。それは親が期待する教育のねらいにつながっている。

例えば、「子どもの自主性を育てる」、あるいは、「子どもの成長力を信頼して、ひとりひとりの自主性を育てる」という保育理念に賛同して入園させていても、それは「たてまえ」として賛同しているのである。自分の子どもに目をむけたときには、その「たてまえ」はもろくも壊れ去ってしまい、親の欲望が表面化してくる。

親の大部分の者は、幼稚園を小学校のための準備段階と考えて

いる。したがって、小学校に入学して困らないようにという要求が幼稚園に対してむけられ、小学校教材のための準備教育を要求してくる。

● 子どもの内面の躍動に関心を向ける

一般に、親や保育者に認められる共通性は、子どもの外側に現われた行動や能力に評価の目がむけられることである。それは、知識であり、社会的適応である。

これらのことからは、幼児においても、また、その後の生活においても要求され、期待されるところの能力であり、行動であるが、これらの能力や行動が一つのパターンとして子どもの枠ぐみとなり、それが人間の存在として、最も重要であり、かつ基本となる内的な躍動力を抑圧するならば、それはむしろマイナス要因とさえなる。

例えば、社会的適応の側面である基本的生活習慣の自立が幼児期の発達課題と考えられ、保育のねらいとしてとりあげられていることが多い。このことは必要なことではあるが、幼児自身が必要性を感じて自発的にしようとしているかを確かめる必要があらう。

幼児が、自発的に自分の力を出し切って活動し、生命力に満ち

あふれている姿に目をとめ、そこに価値を見出すことのできる保育者の存在を確認していかなくてはならない。

この問題を解決することは、これからの幼児教育を方向づける大きな鍵になるのではないかとさえ考えている。

しかし、生命の躍動ということは、数量で表わすことが難かしいだけに、他人に伝えたり理解してもらうことは容易ではない。

それは子どもと大人との共感的理解を通して把握されるといっても、共感的理解を自己体験の中でとらえていく技術を体得していかななくてはならない。つまるところは、子どもの見方の変革が要求されるのである。

二、幼児教育の基本

辻村ジュサプローという人形師が、「自分が人形プロデューサーとして現在にあるその原郷は、幼児期の体験にある」と述懐していたのを聞いたことがある。幼児期に体験した広い満洲の原野に沈んでいく落日の太陽への感動は、何故か自分の創造活動の世界の原郷になっているのであると。

同じようなことは、柳田国男にもみることができる。宮崎修二⁽²⁾朗は、「柳田の学問の源流は、たしかに幼少年期の体験には違

ない。その流れの方向は、柳田を通じて『原郷から学問への流れこみ』と、『その学問は原郷への記憶に溯る』という、はげしい振幅と環流の上に成り立つ」と述べている。

たまたまこの二人が目にとまったのであるが、幼児期に体験した感動が、その人の生き方を左右するほどの影響力があることを知ったとき、幼児教育にたずさわっている者として、一体幼児の何に着目して保育すればよいか、将来の人間性につながるどころの幼児の経験や活動は何か——という極めて重大な、そして、基本的な問題に直面したのである。

最近では、保育のねらいに幼児期の発達課題がとりあげられ、発達課題を達成させることを主な目標としているむきもある。

しかし、発達課題の達成を云々する前に、もっと大切に受けとめていかななくてはならないものがあるのではないか。それは、「感動すること」であり、「自発性の尊重」であり、「興味を育てること」である。これらは事新しい内容ではない、幼児教育の基本として、ごくあたりまえのことである。また、幼児自身の体験と保育者の援助からの二つの要素が混入しているという難点があるが、私なりに考えてみたい。

● 感動すること

昭和三十六年から五年間にわたって、NHKでは五人の誕生した子どものことを録音した。そのうちの一人の女児が、雛段に飾ってあるボンボリを指さして、「きれいね！」と何回も繰り返して感動的に発しているのが印象的であった。

幼児期は感性中心の生活をしているという、幼児が見たものやふれたものに対して驚きを発することは、とりもなおさず感動を現わしているのである。しかも、直接体験の感動から、外なるものを内在化し、内なるものを外在化してイメージをつくりあげていく、そのイメージが幼児体験として残像されていくのではなからうか。

いちょうの落葉で埋まったブランコの腰板に、腰をかけるのではなく、それを枕にして、いちょうの落葉の中に自分を埋めていて二人の幼児たち。外側からみると充実した活動をしているようには認められないが、何故か、満足した面持は、見ている大人に安定感を与える。保育の場にこのような感性を通しての体験を得ることは、幼児が感動することの土壌となるのではなからうか。

感動は美的体験にのみ制限されることはない。成就感を体験したとき、親切な人の心にふれたとき、自然現象にふれたときなどにおいても体験する。しかも、幼児は感動したものに対して興味や関心をもつ。この幼児期にもった自発的興味が何らかのかたち

で自己の内に継続していくという可能性も考えられる。

● 自発性の尊重

倉橋惣三は、自ら伸びようとしている力を自発性と呼んだり、自己活動と名づけている。そしてその内味を、①外界の事物に対する自発的興味、②自己の力を自ら試みようとする発見性及び工夫性（創造性）、③自発的發表性——としている。

すなわち、自発性は、周囲のものに向って示す興味、何でも自らやってみようとする試行と工夫、心の中に湧きあがる想像、それを絵に、製作に、歌に、演出に、絶えず自分を表現していきこうとする發表性に見ることができると。

この自発性は幼児期になって現われるものではない。生理的要求であるとはいえ、乳児は、泣くことによって空腹を訴え、差し出された乳首に吸いついてくる。このように、自発性は乳児の活動において認めることができるが、幼児では一段と顕著になる。

幼児は、外界の事物に興味をもつと、それを自分のものにしようとして活動がおきる。興味をもつことは主体的活動の源泉となる。また、自分の力を自ら試みようとする発見性や工夫性は、試行錯誤の過程を経たり、困難への挑戦という体験をするなどして達成する場合もある。それは、ひとり知的活動に関連する要素だ

けを育てるにとどまらない。主体性を育てることもなり得る。

●興味を育てること

幼児が示した物や人に対する自発的な興味と保育者のねらいがしっかりと結びついたときの学習の効果は大きい。

子どもが興味を示したものを、いかに育てていくか、その方法を考えることは保育者の重要な援助の一つである。このとき、大切な条件は、子どもがどういふ興味をもっているかということ把握することである。また、新し⁽⁵⁾い興味を引き出すためには、保育者の方から課題を投げかけたり、教材など環境の設定によって幼児の好奇心にそれを関連させることもできる。

幼児の興味に基づいてカリキュラムを立案する試みは、Open education (個別学習を徹底するための具体策の一つで、アメリカの学校教育にとりあげられたシステムである)において最近、試みられているが、わが国の幼稚園では、一般には、立案の段階に至っていない。ただし、遊びを中心に保育の展開を営んでいる幼稚園においては、幼児の興味を育てる手だてが試みられている。

三、「芽ばえ」と幼稚園教育要領

幼稚園教育要領の総則及び内容に、「芽ばえ」ということばを数多く発見する。倉橋惣三は、芽ばえ、その基本は、ただ第一段階としての重要性を意味するのみでなく、そこから出発、発生するところの内質的意味を暗示するものとして、「芽ばえ」ということばを用いている。よって、「芽ばえ」には、幼児の生命力や成長力を尊重しているところの保育理念があらわれていると解される。しかも、その生命力や成長力は、自分が自分の行動の主体となることによって実現することができる。

では、幼稚園教育要領では、どのような意味内容を「芽ばえ」ということばによって表わそうとしているのであろうか。極めて分析的ではあるが、「芽ばえ」ということばによって代表されている「ねらい」は、次のようである。

- (一) 情操 (美的情操を含む)
- (二) 道徳性
- (三) 社会生活に必要な態度
- (四) 自主および自律の精神
- (五) 協同の精神
- (六) 知識の理解
- (七) 社会的対象についての理解
- (八) 自然に対する感動

(ウ)工夫する態度や構成する力

これら九つのねらいは、幼児期以後の達成目標でもある。したがって、これらの各々の項目の芽ばえとは何かについての検討が残される。

そこでまず前提として考えておかなければならないことは、幼児が自分の行動の主体となつていくことが育つていくことである。そのためには、先にあげた三つの基本条件が備えられていることである。なぜならば、おそらく、幼児の自発的興味の発展は、この九つのねらいをその主な範疇にするであろうと推定するからである。

四、むすび

「感動すること」、「自発性の尊重」、「興味を育てること」は、本来ならば、入園以前の家庭生活において育てられているところの要素である。しかし、外からの影響を受けやすい乳幼児期の子どもたちは、親や家庭の影響を強く受けて入園してくる。その影響は必ずしも望ましいものばかりではない。私たちは、まず、一人一人の子どもの実態を把握し、その子どもの望ましい面、望ましくない面、育っている面、育っていない面を知ることが保育の

始まりとしなければならない。その上で、はじめて、それぞれの子どもの援助の方向がきまる。

多くの保育者は口を揃えて言う、幼児は保育者の影響をあまりにも強く受け入れるので、恐ろしくなるほどであると。このことは幼稚園においても、外側からの影響を受けやすいという幼児期の特性を如実に物語っている。形式的な保育は幼児に反映されて、形式的な幼児をつくる恐れがある。今日、多くの幼稚園の保育の目標に、自主性あるいは主体性を育てるといふことが書かれているが、本当の意味で自主性や主体性を考えているかどうか。改めて、自主性とは何ぞや、自主性を何故に保育目標とするのか、自主性を育てるための保育の方法など、基本的な問題についてさらに考えていかなければならない。

(大妻女子大学)

(引用及び参考文献)

- (1)岡田・安戸・水野編『保育に生きた人々』風媒社。
- (2)宮崎修二郎『柳田国男 その原郷』朝日新聞社。
- (3)倉橋惣三『大正・昭和保育文献集』第八巻、日本らいぶらり。一九七八。
- (4)津守真『幼児から児童へ、児童心理学』依田新・東洋共編、新旺社、六三〇七八、一九七二。
- (5)本吉圓子『愛ときびしさの幼児教育』あすなる書房、一九七八。